広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第52号　2003　355－361

園生活における幼児の依存構造の変容

若　林　紀　乃

(2003年9月30日受理)

The change of the dependency structure in a kindergarten

Sumino Wakabayashi

The purpose of this study was to examine how the preschooler, who could not get used to a kindergarten at the beginning of entrance, formed peer relationships by changing dependent behaviors to the specific others. Behaviors in the free playtime from the beginning of the entrance to the end of summer vacation were observed, and the dependent behaviors to the specific others were analyzed. For the analysis of dependent behaviors, this study used network analysis and case analysis, after serially analyzing the rate of dependent behaviors. Consequently, the five serial changes of following were shown: ① the dependence to a teacher ② the dependence to a specific friend ③ "relationship" to a specific friend ④ widening the peer relationships to other friends ⑤ peer play while prizing a specific friend. This study also found that in order to make this change happen, the "relationship" with target of dependence was required. Finally, for preschooler to get used to a kindergarten and to enrich peer relationships, this study may suggest that the existence of the target of dependence will be important.

Key words: dependent behavior, preschooler, naturalistic observation
キーワード：依存行動，幼児，自然観察

問題と目的

幼児は，幼稚園・保育園の入園を機にはじめて母子分離の不安を経験する。母親のような，独占できる他者の存在は失われ，初めての流動的な公共環境の中で自分の居場所を求めていかなくてはならない。その場合，安定した依存対象を求めることは当然のことであろう。まして，他の幼児よりも入園の遅れた幼児は，幼稚園の時間の流れになじめず，安定した仲間関係をすぐに形成することは困難である。そのため，過剰に依存行動を示す場合もある。

田中・長藤（1976）によれば，そもそも依存行動とは，「人間対人間の行動についていうもので，社会的行動の1つの形式であり，他人との接触あるいは養護によって生ずる満足に向けられた行動をあらわす」と定義される。具体的な行動様式としては，①身体的な接触を求める，②他人の近くにいることを求める，③他人から言語的及び物理的な助力を求める，④肯定的なしかたで注意を求める，⑤否定的なしかたで注意を求める，⑥保証を求める，⑦ことにのぞんだ時の受身的な姿勢，⑧安全を求め冒険を避ける，の8つの様式がある。①～⑤は⑥⑦⑧に比べ身体的かつ受動的であり，幼い子どもに多く現れる様式である（高橋，1968a）。

これらの依存行動は，自立と対立する概念として取り扱われることが多い。しかし，高橋は一連の研究において，依存の対象や依存方法の決定などはすべて子どもの意志にもとづいており，依存行動を行なうには，ある程度の自立性が必要であるとしている。さらに，ある依存行動の段階から脱却しても，何らかの形の依存的な行動が常に行なわれており，人間はその発達の過程において，ある依存行動の段階から次の依存行動の段階へと変化するということを示唆している。そして，依存行動によって内示的に充足されることが自立のためには必要であるとしている。それらの依存，自立の繰り返しによって，人は個人の存在を支える機能を中核的に果たす1人ないし2人の焦点を中心に，焦

点以外の幾人かが互いに異なる位置を占めるような相互関連的な依存構造を形成する。その依存構造は発達とともに広がりをみせるといわれている（高橋，1968a，1968b，1970）。

実際の保育現場において，特定の他者への過剰な依存行動を懸念する声は高く，その対処に困惑している保育者は少なくない。しかし，依存行動は必ずしもネガティブな行動であるとは限らず，次の依存行動，もしくは自立し，依存構造を広げ，新たな仲間関係を形成するための重要なステップであるということも考えられる。幼稚園における特定の他者への過剰な依存行動が後の仲間形成とどのように関連するのかを体系的に検討する必要があるだろう。

ところで，これら依存行動に関する研究は，親への依存行動と親の養育態度との関連を検討したもの（例えば，久世ら，1976；後浜，1978;Lieberman et al., 1999）や，青年期の友人等への依存行動を検討したもの（例えば，清水，1979；岡田，1984）がほとんどであり，幼児期における幼稚園・保育園での依存行動を研究したものはほとんどない。その中でも，ここ数年の間に，幼稚園における幼児の依存行動に関して，「依存」「よりどころ」「繋がる他者」といったキーワードでいくつかの研究がされはじめている。

例えば，青木（1998）は，幼児が集団状況での不安を軽減するためのよりどころとして保育者の存在をあげている。安定を向けてくれる保育者への依存欲求は自由感を自ら縛っていき，内的に充実できるよりどころを見失い，集団に適応しにくくなることを示している。また，野尻（2000）は，子ども同士が「繋がる」ということは，単なる依存行動ではなく，「大人と子ども」の繋がりとは異なるとしている。そして自分が望む相手とうまく繋がることのできない2人の子どもの姿を中心に据えながら，子どもが他者と繋がるということの意味を検討している。さらに，小野（1998）は，共通活動の場の外接的関係が際立つ場において，接在関係が顕在化し，子ども達が充実し高揚した内接的関係を味わう時，そこに人と人との関係の萌芽をとらえることができるとしている。

これらの研究は親子関係のみならず，幼稚園での人間関係においても重要な依存行動があることを示したという点において大きな意義がある。しかし，その研究のほとんどは，ある特定の単一の他者への依存行動を検討したものであり，異なった依存対象への依存行動を比較した研究は皆無に等しい状態にある。

園には保育者という大人との関係の他に「仲間」という子ども達同士の人間関係が存在する（柴坂，2000）。関係によっては，依存の行動様式も異なり，そればかりかその後の仲間形成に与える影響も違うように思われる。幼稚園における過剰な依存行動が後の仲間形成にどのように関連するのかを体系的に検討する際，異なる依存対象にそれぞれどのような意味があるのかも確認すべきであると考えられる。

また，これまで教育・発達心理学，および保育学等の分野では仲間関係の形成が困難な幼児に関する様々な研究がなされてきた。それらの研究の多くは，仲間関係を形成する方略や形成過程などに注目したもの（例えば，松井，2001）がほとんどであり，仲間と関わりを持とうとするまでに，どのような行動をとっていたのかについて焦点をあてた研究はあまりみられない。幼稚園になじめず，仲間関係を形成しにくい幼児は，仲間と関わるまでに長い時間を要する。保育者は，その期間どのように接するべきなのかということに頭を悩ませることが多い。入園時の過剰な依存行動が何を意味し，そしてその依存行動が仲間関係の形成にどのような影響を及ぼすのかを体系的に確認することは，実際の保育現場に新たな対処法を提案する一助になると考えられる。

そこで，本研究では，入園当初幼稚園になじめない幼児の，異なる依存対象への依存行動を検討することで，それぞれの依存対象が持つ意味を探り，依存構造が変容することと仲間関係の形成との関連を明らかにする。

方　法

研究協力者　H県内幼稚園（3歳児・4歳児・5歳児単学級）。自由保育形態を主としている。観察対象クラスは4歳児クラスで，担任は女性教諭1名である。

観察対象児　4歳児クラスの女児**ゆうこ**（仮名）であった。なお，対象児のプライバシーを保護するために，今後幼児の名前には仮名を使用する。

ゆうこは，発達的な遅れはなく，あいさつや大人とのコミュニケーションスキルは他の幼児と同等程度であった。しかし，4歳児クラスより入園してきたため，3歳児クラスから幼稚園になじんでいる子どもたちのペースについていけず，1日中不安げな表情を浮かべていた。保護者や保育者からも，登園しぶりをくりかえす，甘えが強い子として捉えられていた。

観察時期と手続き　観察対象児**ゆうこ**が入園した2002年4月から8月と9月下旬から10月。1日2～3時間（午前の保育時間），週1～2回程度，フィールドノートを用いた自然観察を実施した。「保育に参加しない観察者」の立場をとり，観察対象児に追従するかたち

で，観察対象児の動向をそのままフィールドノートに記録した。なお，動向を記録する際，時間帯も細かく記録し，対象児の1日の動きが詳細に分かるようにした。

分析方法

(1)対象資料　全観察記録のうち，クラスのイベントがある日や，クラスの欠席者が多い日，観察対象児が病気がちである日などは分析から除外し，各月2回ずつ（9月の記録は除外）計10回の観察記録を分析に用いた。午前の保育時間のうち主に2時間の自由遊び時間の観察記録を分析対象資料とした。

(2)依存行動の抽出　2時間の自由遊び時間の行動を依存行動とそれ以外の行動に分類した。その後，それぞれの行動が何分間生起しているかを分析した。なお，依存行動について田中・長藤（1976），久世ら（1976）を参考に次のような操作的定義を設定した。

①接触を求める…先生や友だちの身体にさわる，だきつく，手をつないで歩く。

②身体的に接近する…先生や友だちのそばに近寄る，後を追う，そばで見ている。

③注意・承認を求める…先生や友だちに誉められることを求める。先生や友達に聞いてもらったり，みてもらうことを求める。

④助力を求める…先生や友だちに積極的に手伝いを求める。先生や友だちに同意，指図を求める。

以上4様式のうち1つでもあてはまる過剰な行動があった場合，依存行動とした。

(3)事例の整理　観察記録から，依存行動と仲間遊びの事例に注目しながら，時期別に典型事例を抽出した。典型事例を時期別に整理することで，対象児**ゆうこ**にとっての依存対象がどのように変化していくのか，その変化は幼稚園生活にどのように関連するのかを分析した。なお，**ゆうこ**の幼稚園生活における人間関係の特徴を把握するために，それぞれの事例について人間関係の構造をネットワーク分析し，ソシオグラムにグラフ化した。ネットワーク分析とは，さまざまな「関係」のパターンをネットワークとしてとらえ，構造を記述分析する方法である（安田，1997）。

結果と考察

依存行動の変化

2時間の自由遊び時間の行動を，次の6つのカテゴリーに分類することができた。①保育者への依存行動，②特定の友だち（対象児**ゆうこ**と同クラスの女児**なな**）への依存行動，③傍観・移動，④1人遊び，⑤特定の友だち（**なな**）との2人遊び，⑥3人以上の仲間遊び，の6つである。なお，**なな**との2人遊びとは，依存行動の操作的定義に当てはまらない2人の関わりであり，具体的な例としては，会話や提案などが双方向に交わされている状態を意味する。

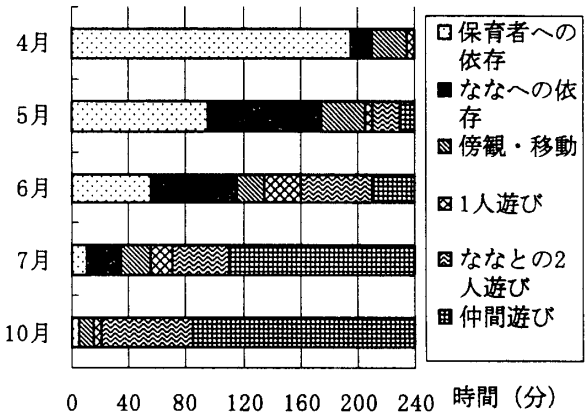

図1．自由遊び時間のゆうこの行動（時期別）

それぞれの行動が各月にどの程度生起していたのかを棒グラフにて図1に示す。なお，各月2回の観察から240分の観察記録を用いた。

図1に示すように，保育者への依存行動の時間は時期を経るにつれて減少し，夏休み明けの10月にはわずかな時間になっていた。さらに，保育者への依存行動の減少に伴い，5月に特定の友だち**なな**への依存行動の時間が長くなっていた。しかし，その依存行動の時間は6月にかけて減少し，その代わりに**なな**との2人遊びの時間が増加していた。そして，7月は，**なな**との時間が減少し，他の仲間と関わる時間が増加していることが分かった。その後，10月から，他の仲間との遊び時間を充実させるとともに，再び**なな**との時間が増加していた。これらのことから，それぞれの時期によって人間関係の質が異なり，それによって依存対象が変化していることが考えられる。さらに，**なな**のような依存対象が先の仲間遊びになんらかの影響をあたえていることも考えられる。

そこで次に，それぞれの時期の依存対象にどのような意味があるのか，依存が自立した仲間関係の形成とどのように関連するのかを探る。その際，**ゆうこ**の人間関係をネットワークにて捉えながら，典型事例を検討する。

＊なお，各月のソシオグラムにおいて，↗は「過剰に求める関係」を示し，⇢は「求める関係」，⇄は「遊ぶ関係」，●は「ネットワークの構成員」をそれぞれ示している。

4月＜保育者への依存＞

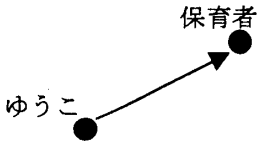

図2-1．4月のソシオグラム

事例1

ゆうこは，先日家でダンボールを切ろうとしてはさみでケガをした手を保育者に見せていた。**ゆうこ**は「バンソーコがはがれそう」と訴えつづけていた。しかし，バンソーコをみた保育者は，「大丈夫よ。はがれないよ。」といってとりあってはくれない。**ゆうこ**はその後も「痛くはなかった」などと保育者に繰り返し話し掛けていた。そのうち，保育者は他のケガをした幼児を治療することになった。保育者は「**ゆうこ**ちゃん先に教室いってて」と誰かと教室で遊ぶよう促した。しかし，**ゆうこ**は「待ってる」といって座り込み，その後も繰り返し保育者に話し掛けたり，うでをつかんだりしている。しかし，保育者の側から離れないでいるものの，教室の様子をちらちらみたり，周りの様子を気にしているようであった。

事例2

外で鯉のぼりに絵の具を塗ることになった。**ゆうこ**は「スモック着れない」と繰り返し保育者に訴えていた。保育者が**ゆうこ**にスモックを着せながら，「鯉のぼりたちはお友だちいっぱいで泳ぐんだよね」などと話かけていると，**ゆうこ**が「うん」といいながら笑った。その笑顔をみた保育者が「**ゆうこ**ちゃん楽しそうね」というと，**ゆうこ**が「なかよしになりたい」といった。保育者は少し驚いた表情で「**ゆうこ**ちゃんもお友達いっぱいふやして，ママもいっぱいふやして，そしたら幼稚園がとってもすてきなところになるね」といった。**ゆうこ**は笑った。その後もみんなからワンテンポ遅れてしまい，保育者のそばでぼーっとみんなをみていると，保育者が「大丈夫。あそこにお友達いっぱい居るでしょ。みんなのところに一緒にいこうね」といった。**ゆうこ**は「ぬりたい」と筆をもってみんなの様子をみながら徐々に夢中になっていった。みんなのすきまに入っていけないときも，保育者と目をあわせつつ入っていこうとした。徐々に夢中になると積極的になっていった。

図2-1や事例1の下線部に示すように，**ゆうこ**は保育者に対して，「注意・承認を求める」「接触を求める」といった過剰な依存行動を繰り返し示していた。この時期，**ゆうこ**にとっての幼稚園における依存対象は保育者1人であり，広がりのない単純な依存構造が形成されていた。しかし，事例2の下線部のように，それらの依存行動は保育者の受動的態度，励ましによって徐々に解消されていくことが考えられる。青木(1998)は，安定を向けてくれる保育者への依存欲求は自由感を自ら縛っていき，内的に充実できるよりどころを見失い，集団に適応しにくくなることを示している。確かに，保育者が依存を過剰に受け入れた場合，自由を束縛する可能性もあるだろう。しかし，今回の事例のようにある程度依存行動を受容し，安心感を与えることは他の幼児と関わりを持つための重要なステップであると考えられる。入園初期の幼児にとって，依存対象である保育者は，仲間の中に入っていく勇気をもつための安全基地の意味合いをもっている場合があると考えられる。

5月＜依存対象の変化～保育者から女児ななへ～＞

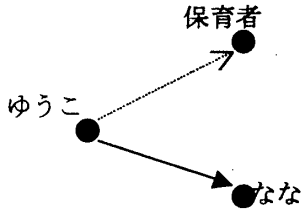

図2-2．5月のソシオグラム

事例3

ゆうこは登園後かばんをもったままうろうろしていたが，保育者が「**なな**ちゃんのお花みて」というとかばんをおいて**なな**に近づいた。**なな**は，**ゆうこ**と家も近く，お母さん同士も知り合いであったため，**ゆうこ**にはもっともなじみのある存在であった。**なな**が「あっちいこう」と**ゆうこ**と手をつないでホールの方へ走っていった。2人でみんなの様子をぐるぐると見渡しているが会話はほとんどない。**なな**は**ゆうこ**と一緒にいるときでも他の子にちょっかいを出したり，他の子を追い掛け回したりする。その様子についていけなかった**ゆうこ**は**なな**から離れて保育者のもとにかけよった。**ゆうこ**は「**なな**ちゃんとね一緒にあそんだの」と話す。保育者が「よかったね。もう遊ばないの？」というと，保育者のうでをつかみながら**なな**の様子を目で追った。しばらくすると**なな**のうしろに再びくっつき，**なな**の手をつなごうとする。ほかの友だちを追い掛け回していた**なな**は**ゆうこ**と手をつないで追いかけっこの続きをした。

5月に入ると，**ゆうこ**は図2-2や事例3の下線部に示すように特定の友だち**なな**と保育者の両方に依存行動を示すようになり，徐々に依存構造に広がりをみせはじめていた。特に**なな**への依存行動は日々増加し，保育者の場合とは異なり，「接近する」といった行動様式を主に示すものであった。

事例4

ななは，保育者に摘んできた花束を紙に包んでもらったので，おもちゃのドレスを着ようと探していた。そこに**ゆうこ**が近づいてきて手をつなごうとした。**なな**は「待ってよ」と手を払ってドレスを探すが，その後ろにぴったりと**ゆうこ**がついてまわる。ドレスをあきらめた**なな**は，どろのハンバーグを作っている男児のもとに近づいた。**ゆうこ**はそのうしろをついていった。**なな**は「この花ハンバーグにのせよう」などと男児と相談した。**ゆうこ**はその様子をじっとみていた。その後男児がハンバーグを作る様子をみていたために**なな**を見失うと**ゆうこ**は走って**なな**を探し，**なな**の手をつないだ。それからもしばらく**なな**が他の友だちと関わる様子をみている状態が続いた。

さらに，保育者の場合と違う点として，事例4の下線部に示すように，単に依存対象から受け入れられることを求めるだけでなく，依存対象の**なな**を通じて周囲の様子を注意深く探索していることが考えられる。このことは，保育者への依存行動で安心感を得，他の幼児と関わってみよう，仲間に入ってみようという思いになった後，他の幼児たちの様子を伺う媒介として**なな**という依存対象を求めているということが考えられる。依存対象である**なな**は，依存対象であった保育者とは異なり，単なる安全基地なだけでなく，他の幼児たちと関わりを持つための媒介人の意味合いを持つと考えられる。

6月＜依存対象から遊び友だちへ＞

図2-3. 6月のソシオグラム

事例5

ゆうこと**なな**はタイヤのブランコ型遊具で遊んでいた。タイヤには終始**ゆうこ**が乗り，**なな**はそれをまわしていた。**なな**がまわしすぎたために，**ゆうこ**は気持ち悪くなった。**ゆうこ**は「あたまいたい。おりたい。」と**なな**に言った。**なな**はあわてて手を離した。急に手を離したために，タイヤは反対周りにまわって勢いよく**なな**にぶつかった。**なな**と**ゆうこ**は顔を見合わせて，笑った。**ゆうこ**「タイヤこっち（右）にまわったね」**なな**「こっち（左）にまわってたよね，さっき」**ゆうこ**「乗って，乗ったら」今度は**なな**がタイヤに乗り**ゆうこ**がまわした。2人はしばらくタイヤで遊んだ後，手をつないで園庭をぐるぐるまわりながら走り，何を話すわけでもなく顔を見合わせて笑った。

この時期になると，図2-3の矢印に示すように，単なる仲間入りのための媒介人であった依存対象**なな**が，遊び友達として確立していっていることが分かった。**ゆうこ**が**なな**に依存し，ともに行動する中で，事例5の下線部に示すように，楽しみを共有する喜びを確認していったことが関連していると考えられる。及川（2000）によれば，自分の興味が友だちの興味と結びついてきたり，友だちの好奇心を引き出すことができたりすると，仲間で楽しみを共有して遊べるようになるという。**ゆうこ**は，**なな**と楽しさを共有することで，**なな**を単なる依存対象から「繋がる」友だちへと変化させ，遊びを充実させていったと考えられる。

7月＜遊び友達を増やす＞

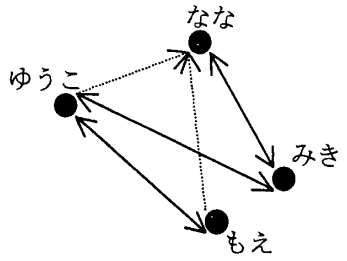

図2-4. 7月のソシオグラム

事例6

ななと**ゆうこ**は裏山でターザン遊びをしていた。そのすぐ側に**もえ**がやってきて，もう一本のターザン縄で遊びだした。（**もえ**は比較的明るく，遊びも活発な子）**ゆうこ**はすぐに**もえ**に近づき「私もやるからみてて」と関わろうとした。しかし，**もえ**はすぐに他のところへ行ってしまった。**ゆうこ**は不安そうに周りをきょろきょろ見渡したが，そこに**なな**がいるのをみて，笑顔で**なな**の使っている縄をつかんだ。しばらくすると，**みき**がやってきた。（**みき**はしっかりしていて遊びを仕切ることも出来る子）**なな**は**みき**に近づくと「一緒にぶらぶら（ターザン）しよう」といった。**みき**は

しばらくななと交替でターザンごっこをしていたが，ひとりぼっちのゆうこに気づき，「ゆうこちゃんもこっちに並んで，順番にしたらええんよ」とゆうこを引っ張ってきた。その後もえがもう一度戻ってきたため，ゆうこはもえとともにもう一本のターザン縄で遊んだ。

図2-4，事例６の下線部に示すように，７月になると，２人で遊びながらも新しい仲間との関わりを盛んに求めるようになった。柴坂（2000）によれば，幼児において，仲間の中で「この子でなければ」と１人の子どもに固執すると，結局相手も自分自身も苦しくしてしまうことがある。そのため，ある時そのこだわりを捨てて，仲間を広げる体験をする子ども達がいるという。ゆうこは，ななを依存対象から繋がる大切な他者へと変化させた後，他の依存できる他者を求め，依存構造を広げることで遊びの幅を広げようとしていたと考えられる。

10月＜仲間関係の形成＞

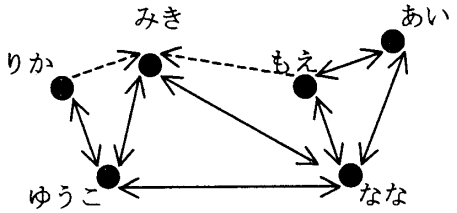

図2-5．10月のソシオグラム

事例７

この日ゆうこはりかとみきに誘われて裏山のたんけんの森へ行った。ななもたんけんの森へついていったが，そこにはもえとあいの姿もあった。それぞれが分担してケーキ屋さんごっこをはじめようと準備した。りかやみきはゆうこに向かって「この砂使おっか」とか，「お水いるよね」などと相談していた。ななはとなりのテーブルでもえやあいに「これ混ぜようよ」とか，「チョコレートにしよう」と言われながらも，みきやゆうこのところをじっとみていた。しばらく，ケーキ屋さんは２つのグループに分かれて進行した。すると，なながバケツを蹴飛ばし，汲んできた水をこぼしてしまった。ゆうこはすぐにななにかけより「お水汲んできたら」といった。しかし，ななはもじもじして泣きべそをかいている。ゆうこが「一緒にいく？」というと反応は薄いものの，ゆうこの手をつないで水を汲みに出かけた。その後水を汲んできた２人は笑顔でそれぞれのケーキ屋さんに分かれて遊んだ。

10月になると，ゆうこの仲間関係はさらに活発化していった。事例７の波線部や図2-5に示すように，２つの小グループから成る女児グループで遊ぶことが多くなっていた。しかし，その中で興味深いことは，事例7の下線部に示すように，仲間関係が広がり，ななとの関係が希薄になったかのようにみえても，１度繋がった友だちななとの関わりを持ちつづけているということである。

高橋（1968b）によれば，人は個人の存在を支える機能を，中核的な役割を果たす焦点を中心に，焦点以外の幾人かが互いに異なる位置を占めているような相互関連的な依存構造を形成するという。ゆうこにとって１度「繋がる」関係を持ったななは，依存構造の中核的な焦点であることに変わりはなく，焦点以外の依存構造が広がりはじめていると考えられる。

まとめ

本研究は，入園当初幼稚園になじめない幼児が，特定の他者への依存行動をどのように変容させ，仲間関係を形成していくのかを探るものであった。分析の結果，対象児ゆうこは時を経るにつれて依存構造を変容させ，仲間関係を形成していっていることが分かった。図３に示すように，①保育者への依存（事例１），②特定の友だちへの依存（事例４），③特定の友だちと繋がる（事例５），④他の仲間への広がり（事例６），⑤特定の友だちを大事にしながらの仲間遊び（事例７），の５つの変容過程にまとめることができる。そして，各過程はそれぞれ違った機能を持ちつつも相互に関連しあい，仲間関係の充実の一役を担っていると

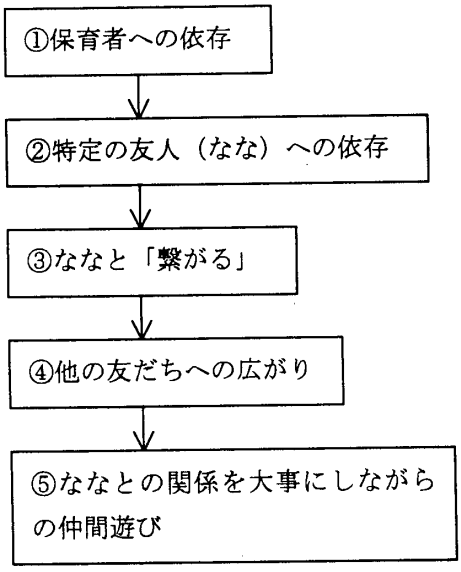

図３．依存対象の変化と仲間遊びの成立

考えられる。このような変容過程は，保育現場にて，もしくは保育学等の分野にて，暗黙的に広く理解されてきたものであるが，本研究においてあらためて明示することで，異なる依存対象のそれぞれがもつ意味を示すことができた。

ゆうこの場合，依存対象である保育者は仲間を形成するための勇気を与える安全基地であった。一方特定の友だち**なな**は，他の友だちの様子を伺うための媒介人であった。そして，媒介人の役目を果たした**なな**は「繋がる」他者となり，依存構造の中核となって，依存構造の広がりとその後の仲間関係の充実に大きな影響を及ぼした。こういった依存対象である**なな**の果たす役割は，これまで見逃されがちであった。鯨岡（1998）によれば，全ての人間関係の根底には繋合希求性と自己充実欲求の両者の成立があるという。1人の友人と心から繋がり，自己充実感を安定させていくことは，やがて1人の仲間にのみ依存するだけでなく，さまざまな友達と関わっていくための基盤になると考えられる。本研究が示すように，人と繋がり，自己充実感を高めていくための最初のステップが依存行動であるならば，幼稚園になじみ，仲間関係を充実させていくためには，時期に応じた依存対象の存在が重要であると考えられる。そして，**ゆうこ**にとっての**なな**のような，依存構造の中核的焦点を据えながら，依存構造を広げていくことが仲間関係の発展につながると考えられる。

今回は1人の事例から探索的に検討したため，依存対象と仲間関係の形成との関連における数量的データの検証の必要性を残している。しかし，本研究におけるこれらの知見は，入園時の過剰な依存行動への保育者の対処を見直し，仲間遊びに踏み切るまでの時期の充実に対する教育的介入にとって有効な資料になると考えられる。今後，より多くの事例をもとに幼児の幼稚園での依存対象の意味，幼児期の依存構造の成り立ちがさらに検討されていくことが望まれる。

【引用文献】

青木久子 1998 よりどころの形成－その3：幼児の集団状況への意味付与にみる情動不安をてがかりに．日本保育学会第51回発表論文集，334．

後浜恭子 1978 モデルへの依存性と養育態度の認知が幼児の模倣行動におよぼす影響．心理学研究，**49**，241-248．

久世敏雄・石黒敬子・後藤宗理・速水敏彦・今川峰子・三神広子 1976 幼児の依存行動・攻撃行動に関する縦断的研究．名古屋大学教育学部紀要教育心理学科，**23**，219-235．

鯨岡　峻 1998 両義性の発達心理学 ミネルヴァ書房．

Lieberman, M., Doyle, A., & Markiewicz, D. 1999 Developmental patterns in security of attachment to mother and father in late childhood and early adolescence: associations with peer relations. *Child Development,* **70**, 202-213.

松井愛奈 2001 仲間との相互作用のきっかけにおける転換と一貫性．保育学研究，**39**，195-201．

野尻裕子 2000 幼児にとって相手と「繋がる」ということの意味．保育学研究，**38**，20-27．

及川　研 2000 幼児期に遊びに熱中することの大切さ．児童心理，**54**，1195-1200．

岡田　努 1984 青年期の自己概念－依存対象との関連において．立教大学心理学科研究年報，**27**，51-62．

小野真理子 1998 友達をつくる－幼児にとって同輩が友だちになるとき．女子体育，**40**，8-11．

柴坂寿子 2000 子どもをめぐる人間関係(2)－園における幼児の仲間関係．日本家政学会誌，**51**，659-664．

清水弘司 1979 大学生における性の発達と依存対象について．心理学研究，**50**，265-272．

高橋恵子 1968a 依存性の発達的研究：Ⅰ－大学生女子の依存性．教育心理学研究，**16**，7-16．

高橋恵子 1968b 依存性の発達的研究：Ⅱ－大学生との比較における高校生女子の依存性．教育心理学研究，**16**，26-36．

高橋恵子 1970 依存性の発達的研究：Ⅲ－大学・高校生との比較における中学生女子の依存性．教育心理学研究，**18**，1-11．

田中敏明・長藤良枝 1976 幼児の依存行動の変容に及ぼす養育態度の効果．福岡教育大学紀要第4分冊教職科編，**26**，61-69．

安田　雪 1997 ネットワーク分析：何が行為を決定するか．新曜社．

付記　本研究の一部は，中国四国心理学会第59回大会にて発表したものである。本論文をまとめるにあたり，ご指導頂きました広島大学大学院教育学研究科教授山崎晃先生に深く感謝致します。また，データ収集にあたりご協力頂きました幼稚園の先生方，園児の皆様に厚くお礼申し上げます。

（主任指導教官　山崎　晃）